

DISCUSSION PAPER SERIES

Centre for New European Research

21st Century COE Programme, Hitotsubashi University

026

ビザンツ継承国家と十字軍国家の
貨幣とプロパガンダ（1204～61年）
－帝国亡命期の政治史より－

西村道也

April 2007



<http://cner.law.hit-u.ac.jp>

Copyright Notice

Digital copies of this work may be made and distributed provided no charge is made and no alteration is made to the content. Reproduction in any other format with the exception of a single copy for private study requires the written permission of the author.

All enquiries to cs00350@srv.cc.hit-u.ac.jp

ビザンツ継承国家と十字軍国家の貨幣とプロパガンダ（1204～61年）

—帝国亡命期の政治史より—*

一橋大学大学院経済学研究科博士後期課程

西村道也

はじめに

1204年、ビザンツ帝国の首都コンスタンティノープルは第4回十字軍に占領された。1204年からコンスタンティノープルを首都とするビザンツ帝国が再興する1261年までの時期は、帝国の亡命期と呼ばれる。この期間に、かつての帝国の領域は、ラテン帝国を中心とする十字軍国家群とビザンツ継承国家と呼ばれる亡命政権群に分割された。これらの諸政権は、亡命期を通じて、コンスタンティノープルの支配権をめぐる争いとなつた¹。

この亡命期において、ほとんどの政権が、1204年以前のビザンツ帝国の貨幣体系をモデルにして貨幣を発行した。モデルにされた貨幣体系は、皇帝アレクシオス1世コムネノス（1081～1118年）によって、1092/93年にかけての財政年度に導入されたものである。この貨幣体系を構成していたのは、ノミスマ・ヒュペルピュロン金貨（以降ヒュペルピュロン金貨と略）、アスプロン・トラキュ琥珀金貨、アスプロン・トラキュ劣銀貨、テタルテロン銅貨、半テタルテロン銅貨の5種類（貨幣素材としては4種類）のコインである²。

本稿の目的は、亡命期にビザンツ継承国家と十字軍国家が発行したコインの種類から、プロパガンダの手段としての貨幣の意味を考察することである。ビザンツ帝国のコインには、ほとんどの場合、発行者である皇帝の銘と、皇帝自身とキリスト・マリア・聖人等の

* 本稿は拙稿、“Propaganda and Denominations of the Byzantine Successor States and the Crusader States (1204-1261): An Essay on the Political History of the Empire in Exile”, *Mediterranean World*, 18 (2006), pp.197-209.を邦訳し、加筆・訂正したものである。

¹ この時代の概説として、G・オストロゴルスキー『ビザンツ帝国史』和田廣訳、恒文社、2001年、545～609頁。

² M. F. Hendy, *Coinage and Money in the Byzantine Empire, 1081-1261*, Washington D.C., 1969. Idem, *Catalogue of the Byzantine Coins in the Dumbarton Oaks Collection and the Whittemore Collection: Vol.4, Alexius I to Michael VIII, 1081-1261*, Washington D.C., 1999. C. Morrisson, “Byzantine Money: Its Production and Circulation”, in *The Economic History of Byzantium*, ed. A. E. Laiou, Washington D.C., 2002, pp.909-966. 貨幣体系を構成したコインは、一次史料上では様々な名称で現れる。本稿では、近代以降の古銭学の用語法に従う。これらのコインは12世紀においては、ヒュペルピュロン金貨（～4.3g、金含有率～87%）：アスプロン・トラキュ琥珀金貨（～4.3g、金含有率10～30%）：アスプロン・トラキュ劣銀貨（～4.3g、銀含有率6～2%）：テタルテロン銅貨（～4g）：半テタルテロン銅貨（～2g）＝1:3:48:288か864?:576か1728?と計算されていたという。Hendy, *Catalogue*, p.51. Morrisson, “Byzantine Money”, p.924.

肖像が打刻されていた。貨幣は前近代社会における主要なメディアであった。そのため、皇帝が誰であるかを示すプロパガンダの手段としての貨幣の機能は重要であったといえよう³。そして、諸政権がビザンツ帝国の貨幣体系をモデルにコインを発行したことは、自らが帝国の後継者であることを主張するプロパガンダであったと考えられるだろう。

ところで、亡命期のビザンツ故地の貨幣流通の実態は、明らかではない。歴史学と古銭学の研究の成果として、様々な種類のコイン（ビザンツ継承国家、十字軍国家、かつてのビザンツ帝国、西欧の国家が造ったもの）が混在してビザンツ故地で流通していたと考えられている⁴。このような複雑な貨幣流通について、本稿では立ち入った議論は行わない。

表1 ビザンツ継承国家と十字軍国家が発行したコイン

	-----	-----	-----	-----	-----
-----	-	-	-	-	-
-----	-	-	-	-	-
----- _1224_ 46_	-	-	-	-	-
-----	-	-	-	-	-
----- _1205_ 24_	-	-	-	-	-
----- _2_	-	-	-	-	-
-----	-	-	-	-	-

さて、表1は、かつてのビザンツ帝国の貨幣体系をモデルにして、亡命期にビザンツ継承国家と十字軍国家が発行したコインである⁵。まず、13世紀には、アスプロン・トラキユ琥珀金貨が銀貨となり、アスプロン・トラキユ劣銀貨が銅貨になっていた点で、12世紀とは異なることを指摘する必要があるだろう⁶。表中のニカイア帝国、エピロス政権、テッサロニケ帝国（1224～46年）は、ビザンツ皇族に連なる家系の支配者を頂くビザンツ継承国家である。ラテン帝国とテッサロニケ王国（1205～24年）は、十字軍国家である。12世紀後半にビザンツ帝国から独立した第2次ブルガリア帝国とセルビアは、ビザンツ継承国家に含めることもできよう。最後のロードスは、同島で独立していたガバラス家である。

³ 概説ではあるが、V. Penna, *Byzantine Coinage, Medium of Transaction and Manifestation of Imperial Propaganda*, Nicosia, 2002.

⁴ A. M. Stahl, “Coinage and Money in the Latin Empire of Constantinople”, *Dumbarton Oaks Papers*, 55 (2001), pp.197-206. A. Laiou, “Use and Circulation of Coins in the Despotate of Epiros”, *Dumbarton Oaks Papers*, 55 (2001), pp.207-215.

⁵ Hendy, *Catalogue*, p.52, Table 3 より作成。ラテン帝国がコンスタンティノーブルで発行した半テタルテロン銅貨について、表1はヘンディの分類とは異なる。これはこのコインが彼のカタログに収録されていないためである。ibid., p.664 を参照。

⁶ モリソンは、1204～1304年の間の各コインの関係を、ヒュペルピュロン金貨 (~4.3g, 75~50% Au) : アスプロン・トラキユ銀貨(~4.3g, ~95% Ag) : アスプロン・トラキユ銅貨(~4.3g) : テタルテロン銅貨(~2.2g) = 1 : (12) : (288) : (576)と推定している。Morrisson, “Byzantine Money”, p.925.

表 1 からは、3 つの傾向を指摘できる。第 1 の傾向は、アスプロン・トラキュ銅貨が最も多くの政権が発行したコインであり、次がアスプロン・トラキュ銀貨ということである⁷。第 2 の傾向は、ビザンツ継承国家であるニカイア帝国とテッサロニケ帝国が、他の政権よりかつてのビザンツ帝国の貨幣体系をカバーしていることである。第 3 の傾向は、12 世紀の地中海世界の国際的交換手段のひとつとして知られるヒュペルピュロン金貨⁸を、ニカイア帝国とブルガリア、疑問符付きだがラテン帝国の 3 つの政権が発行したことである。

なお、本稿では、コンスタンティノーブルをめぐる政治情勢で重要な役割を果たしていないセルビアとロードスのコインについては扱わない⁹。また、表 1 には含まれないが有名なビザンツ継承国家であるトレビゾンド帝国は、ビザンツ式のコインではなく独自のコインを発行し、後述するが当該期の政治情勢で重要な役割を果たせなかった。このため、この帝国のコインについても本稿では扱わないことにする。

本稿では、亡命期を、金貨発行が停止していた時期と再開後の時期のふたつに分ける。そして、亡命期の政治史を辿りつつ、それぞれの支配者が発行したコインの種類を精査する。最後に、上記の 3 つの傾向から亡命期の貨幣発行の意義を考察し、結びにかえたい。

1. 金貨発行の停止—1204 年～1230 年頃—

コンスタンティノーブル占領後、十字軍士たちとヴェネツィア人はフランドル伯ボードワンを皇帝として選出した。十字軍の指導者であったモンフェラート侯ボニファチオは皇帝として選ばれなかった。これは、実力のある人物が皇帝になることを十字軍のスポンサーであったヴェネツィアが望まなかったためだとされる。次に、十字軍士たちは、ビザンツ帝国領を自分たちの封土に分割した。ボニファチオは、皇帝ボードワン 1 世（1204～85 年）と対立し、独自に征服を行いテッサロニケ王となった。テッサロニケ以外の要地には、ブロワ伯ルイがニカイア公、ルニエ・ド・トリートがフィリッポポリス公、エティエンヌ・ド・ル・ペルシェがフィラデルフィア公として封じられた¹⁰。

⁷ Hedy *Catalogue*, pp.52-53.

⁸ 例えば、A. E. Laiou, “Byzantine Trade with Christians and the Muslims and the Crusades”, in *The Crusades from the Perspective of Byzantium and the Muslim World*, ed. idem, Washington D.C., 2001, pp.157-196.

⁹ セルビアのコインについては Hedy, *Catalogue*, pp.635-638. ガバラス家のコインについては *ibid.*, pp.648-650.

¹⁰ G・ヴィルアルドゥワン『コンスタンチノーブル征服記—第 4 回十字軍』伊藤敏樹訳、講談社学術文庫、2003 年。J. Longnon, *L’empire latin de Constantinople et la principauté de Morée*, Paris, 1949. *A History of the Crusades*, vol.2, ed. K. Setton, Madison, 1969.

ただ、ビザンツ帝国領の配分を決めたものの、十字軍士たちは実際に各地を征服していなかった。そのため、十字軍士たちはビザンツ領征服に着手した。しかし、彼らの征服事業は、第2次ブルガリア帝国の存在によって頓挫することになった。1205年4月、皇帝ボードワンが率いる十字軍士たちは、ブルガリアのツァーであるカロヤン（1197～1207年）にアドリアノーブルで敗北した。この結果、皇帝ボードワンやニカイア公ルイ、フィラデルフィア公エティエンヌを含む多くの十字軍士たちが死亡した。また、テッサロニケ王ボニファチオもブルガリア軍によって1207年に殺されてしまう。ラテン帝国はボードワン1世の弟アンリ・ド・フランドル（1206～16年）が、テッサロニケ王国はボニファチオの息子デメトリウス（1207～24年）が継承したが、勢力を拡大させることはできなかった。

だが、十字軍士たちが亡命期以降も存続する強固な地盤を築いた地域もあった。それは、ペロポネソス半島とアッティカ地方、ボイオティア地方、そしてキクラデス諸島である¹¹。1205年に、ギヨーム・ド・シャンリットとジョフロワ・ド・ヴィルアルドゥアン（同名の歴史家の甥）はペロポネソス半島に侵入した。彼らは、この地にアカイア公領を設置し、ギヨームが最初の公になった。また、オトン・ド・ラ・ロシュは、テッサロニケ王の封臣であるアテネ領主として、アッティカ地方とボイオティア地方を征服した。

ヴェネツィア共和国は、多くの重要な港とクレタ島を直轄領とした。だが、共和国は、キクラデス諸島の征服は、個人の事業に委ねた。共和国のドージェであったエンリコ・ダンドロ（1192～1205年）の甥マルコ・サヌードは、1207年にヴェネツィアの貴族たちとキクラデス諸島の征服に乗り出した。征服に成功した彼は、この地にナクソス公領（或いは多島海公領）を創設した。

十字軍国家に対してビザンツ帝国の貴族たちは、3箇所を拠点にして勢力を回復しつつあった。先の皇帝アレクシオス3世アンゲロス（1195～1203年）の義理の息子テオドロス・ラスカリスは、小アジアのニカイアにおいてビザンツ勢力を結集した。1208年に、彼は、コンスタンティノーブルに代わる総大主教座をニカイアに設置し、皇帝として戴冠された。1211年、テオドロス1世ラスカリス（1205年～、皇帝として1208～21年）は、再度皇帝位を狙う義父アレクシオス3世と彼を支援したルーム・セルジューク朝のスルタンであるカイ・ホスロー1世を破った。彼は義父を捕らえ、スルタンを処刑した。こうして、テオドロス1世は小アジアのビザンツ勢力の指導者としての立場を確固にした。彼に始まる亡

¹¹ P. Lock, *The Franks in the Aegean, 1204-1500*, London, 1995. W. Miller, *The Latins in the Levant: a history of Frankish Greece (1204-1566)*, London, 1908. J. Longnon, "The Frankish States in Greece, 1204-1311", in *A History of the Crusades*, vol.2, pp.234-275.

命政権が、ニカイア帝国である¹²。

先のビザンツ皇帝イサキオス 2 世アングロス（1185～95 年）とアレクシオス 3 世のいとこであるミカエル・コムネノス＝ドゥーカスは、エピロス地方のアルタを中心に旧ビザンツ勢力を糾合することに成功した。エピロス政権として知られる彼の政権は、ビザンツ勢力のヨーロッパ側の中心地となった。ミカエル 1 世コムネノス＝ドゥーカス（1204 年頃～15 年頃）の後継者たちは、亡命期の政治状況における重要な役割を果たした¹³。

第 4 回十字軍のコンスタンティノープル占領以前に、ビザンツ皇帝アンドロニコス 1 世コムネノス（1183～85 年）の孫であるアレクシオスが、グルジアの女王タマルの支援を受けてトレビゾンドで独立し、自身が正統な皇帝であると主張していた。彼に始まる政権がトレビゾンド帝国である¹⁴。だが、亡命期の初期に、この帝国の勢力圏は、ニカイア帝国とルーム・セルジューク朝によってトレビゾンド周辺に制限されてしまう。

優勢なビザンツ継承国家に対し、ラテン皇帝アンリは帝国をよく維持していた。だが、彼は、1216 年に子を残さずに死去した。そのため、ボードワン 1 世とアンリの妹ヨランドが、夫ピエール・ド・クルトネと共にラテン帝国の後継者となった。しかし、新皇帝ピエール（1216 年）は、フランスからコンスタンティノープルに赴く途上エピロス政権に捕らえられ、殺害された。ラテン皇帝位は、ヨランド（1216～19 年）によって継承された。その後、彼女の息子たちロベール（1221～28 年）とボードワン 2 世（1228～61 年）にラテン皇帝位は継承された。だが、ラテン帝国は、徐々にではあるが着実に弱体化していった。

表 2 ラテン帝国とテッサロニケ王国が首都で発行したコイン

	----- --	----- -----	----- -----	----- --	----- --
----- _1205_ 24_	-	-	-	-	-

表 2 は、ラテン帝国とテッサロニケ王国が首都で発行したコインである¹⁵。まず、十字

¹² M. Angold, *A Byzantine Government in Exile*, Oxford, 1975.

¹³ D. M. Nicol, *The Despotate of Epiros*, Oxford, 1957. 1267 年以降については、idem, *The Despotate of Epiros, 1267-1479*, Cambridge, 1984.

¹⁴ W. Miller, *Trebizond: The Last Greek Empire*, London, 1926. A. Bryer, *The Empire of Trebizond and the Pontos*, London, 1980.

¹⁵ コンスタンティノープルで発行されたコインについては Hendy, *Catalogue*, pp.664-667, pp.673-690. テッサロニケで発行されたものについては *ibid.*, pp.668-669, pp.690-694. 十字軍国家が発行したコインに関して、ヘンディはラテン模造トラキユ貨とヴェネツィアの小型トラキユ貨の問題を提起している。ラテン模造トラキユ貨については *ibid.*, pp.80-88, pp.661-669. ヴェネツィアの小型トラキユ貨については *ibid.*, pp.670-672, pp.694-697.

軍国家のコインには極めて特徴的な点がある。それは、これらの支配者の銘が刻まれたコインが現存していないことである。ラテン人君主が自身の名でコインを発行しなかった理由は、現在でも分かっていない¹⁶。

次に、ヘンディによって十字軍国家の金属貨幣と同定されたものを見てみよう。彼の同定では、ラテン帝国は、アスプロン・トラキュ銅貨とおそらくヒュペルピュロン金貨を発行したとされる。14世紀のフィレンツェの商人であるペゴロッチィは、『商業実務 *La pratica della mercatura*』において、ペルペリ・ラティーニ・ド・オーロ *perperi latini d'oro* と呼ばれた金貨に言及している¹⁷。この金貨は、ラテン帝国が発行したものだが、ニカイア帝国のヒュペルピュロン金貨の模造品だと考えられている¹⁸。また、テッサロニケ王国は、1224年に滅びるまでにアスプロン・トラキュ銅貨と半テタルテロン銅貨を発行したとされる。

ラテン帝国とテッサロニケ王国が発行したコインの最大の特徴は、支配者の銘が無いことである。この点で、これらの十字軍国家は、ビザンツ帝国の貨幣体系をモデルとしつつも、帝国の後継者であることを示す政治的プロパガンダの手段としてコインを活用できなかったといえよう。

エピロス政権ではミカエル1世が1215年に死に、義弟であるテオドロス・コムネノス＝ドゥーカス（1215年頃～30年）が後を継いだ。テオドロスは、1216年にラテン皇帝ピエールを捕らえ、1224年にかつての帝国第2の都市テッサロニケを占領した。彼は、オフリド大主教デメトリオス・コマティアノスによって1227年に皇帝に戴冠された。この時点で、テッサロニケ帝国の皇帝テオドロス・コムネノス＝ドゥーカス（皇帝として1227年頃～30年）はエピロス地方に加えてテッサリアとマケドニアの両地方を支配下にしていた。

1230年、トラキア地方の完全支配をめざした皇帝テオドロスは、ブルガリアに戦争を仕掛けた。だが、彼の軍は、クロコトニツァでイヴァン2世アセンの率いるブルガリア軍に敗北した。テオドロスの領地と地位は彼の弟マヌエル・コムネノス＝ドゥーカスによって引き継がれた。捕らえられたテオドロスは目を潰されつつも解放された。盲目となったテオドロスはテッサロニケの帝国を弟と共に運営しようとした。だが、その努力に反して、テオドロスとマヌエルの甥であるミカエル2世コムネノス＝ドゥーカス（1236年頃～68年頃）がエピロスで独立し、テオドロスの帝国はふたつに分裂した。

¹⁶ A. M. Stahl, "Coinage and Money", pp.197-206. G. Schlumberger, *Numismatique de l'Orient latin*, Paris, 1878; repr. Graz, 1954, p.274.

¹⁷ F. B. Pegolotti, *La pratica della mercatura*, ed. A. Evans, Cambridge, 1936, pp.288-289.

¹⁸ Hendy, *Catalogue*, p.53, pp.475-477, pp.661-663.

表 3-1 は、エピロス政権が首都アルタで発行したコインである¹⁹。まず、この政権のコインで現存するものは、数が少ないことを指摘する必要があるだろう²⁰。この政権は、アスプロン・トラキュ銀貨とアスプロン・トラキュ銅貨の2種類のコインを発行した。ミカエル2世は2種類のコインを発行しているが、他の支配者はアスプロン・トラキュ銀貨のみである。ニカイア皇帝ヨハネス3世ドゥーカスとミカエル2世の両名の名によるアスプロン・トラキュ銅貨は、彼らが同盟しヨハネス3世の孫娘とミカエルの息子が婚約したことを記念してテッサロニケで発行されたと考えられている²¹。

表 3-1 エピロス政権がアルタとテッサロニケで発行したコイン

	_____	_____	_____	_____	_____
_____ 1_					
_____ 1204_ 15_	-	-	-	-	-
_____ 1215_ 30_	-	-	-	-	-
_____ 1230_ 36_	-	-	-	-	-
_____ 2_					
_____ 1236_ 68_	-	-	-	-	-
_____ 3_					
_____ 2_					
_____ 1248_	-	-	-	-	-

表 3-2 テッサロニケ帝国（1242年以降専制公国）が首都で発行したコイン

	_____	_____	_____	_____	_____
_____ 1225_ 30_	-	-	-	-	-
_____ 1230_ 37_	-	-	-	-	-
_____ 1237_ 44_	-	-	-	-	-
_____ 1244_ 46_	-	-	-	-	-

表 3-2 は、テッサロニケ帝国（1242年からはテッサロニケ専制公国）がその首都で発行したコインである²²。テッサロニケは、コンスタンティノーブルと並ぶ12世紀のビザンツ帝国の常設造幣所の所在地であった。全てのテッサロニケの支配者は、アスプロン・トラ

¹⁹ Hendy, *Catalogue*, pp.621-631.

²⁰ Hendy, *Catalogue*, pp.627-631.

²¹ Hendy, *Catalogue*, pp.625-626. pp.630-631.

²² Hendy, *Catalogue*, pp.543-600. C. Morrisson, "The Emperor", pp.173-203.

キュ銅貨を発行している²³。皇帝を称した時期のテオドロス・コムネノス＝ドゥーカスのみが、ヒュペルピュロン金貨を除く4種類のコインを発行し、かつてのビザンツ帝国の貨幣体系を広くカバーしている。また、テオドロスのコインは多くが現存している。この点が、この政権の貨幣発行の特徴であると思われる。だが、テオドロスの没落以降、彼の後継者たちは、最大で2種類のコインしか発行しなかった。そして、ニカイア帝国が1246年にテッサロニケを占領したため、この政権による貨幣発行は終焉を迎えた。

2. 金貨発行の再開—1230年頃～1261年—

ブルガリアとセルビアを含むビザンツ帝国の故地で、ヒュペルピュロン金貨の再発行が始まったのは1230年頃であったとされる²⁴。先に見たように、金貨を発行したのは各政権のなかで、ラテン帝国（模造だが）と、ニカイア帝国、ブルガリア帝国であった。

ブルガリア帝国は、1204年以降の政治情勢で重要な役割を果たしてきた。カロヤンは、ラテン帝国とテッサロニケ王国を次々に破った。だが、カロヤンが1207年にテッサロニケ包囲の陣中で暗殺されて以降、ブルガリアは10年以上の混乱に陥った。この混乱は、カロヤンの甥イヴァン2世アセン(1218～41年)が登極することで収束した。イヴァン2世は、1230年にテッサロニケ皇帝テオドロスを破るなど、コンスタンティノーブルをめぐる政治情勢に積極的に介入した。1230年代に、第2次ブルガリア帝国は最盛期を迎えた。しかし、イヴァン2世の死後、ブルガリアはモンゴル帝国の攻撃を受け、その影響力は低下した。

表4 ブルガリア帝国がオフリド（かテッサロニケ）とタルノヴォで発行したコイン

	-----	-----	-----	-----	-----
----- 2 ----- 1218 41	-	-	-	-	-
----- 1257 77	-	-	-	-	-

表4は、ブルガリア帝国がオフリド（かテッサロニケ）とタルノヴォで発行したコインである²⁵。ブルガリア帝国の造幣所は、イヴァン2世アセンの時代にはオフリド（かテッ

²³ デメトリオス・コムネノス＝ドゥーカスのものとして同定されているアスプロン・トラキュ銅貨は支配者の銘がない。そのため、ヘンディとは異なる同定もある。例えば、ベンダールはこのアスプロン・トラキュ銅貨をイヴァン2世アセンのものと同定する。S. Bendall, "A Comment on the Coinage of John Comnenus-Ducas (1237-1244) in the Light of a New Discovery", *Numismatic Circular*, 113-5 (2005), pp.312-314.

²⁴ ヘンディは、ニカイア帝国が1227年に金貨を再導入したと推定する Henty, *Catalogue*, pp.473-475. 一方でイヴァン2世については1230年からと推定する *ibid.*, pp.639-641.

²⁵ Henty, *Catalogue*, pp.639-647. ブルガリアの模造トラキュ貨については、*ibid.*, pp.67-80, pp.435-443.

サロニケ)²⁶に、コンスタンティン・アセン（1257～77年）の時代にはタルノヴォにあったと推定されている。イヴァン2世は、ヒュペルピュロン金貨とアスプロン・トラキュ銅貨の2種類のコインを発行した。彼の金貨の金含有率は18カラットである²⁷。この金貨の金含有率は、コムネノス朝とアングロス朝の皇帝の金貨の理想的な金含有率20 1/2カラット（=85.42%）ならびにモリソン等が分析した1204年以前の当該期の平均83.23%（=20カラット）²⁸よりも低い。また、現存するイヴァン2世の金貨は極めて少ない。そのため、イヴァン2世は少数の金貨を、何かの記念として発行したと考えられている。その他、イヴァン2世とコンスタンティン・アセンは共にアスプロン・トラキュ銅貨を発行している。これは、亡命期の貨幣発行の第1の傾向に一致する。

ニカイア帝国では、テオドロス1世ラスカリスが1221年に死に、彼の義理の息子ヨハネス・ドゥーカス・ヴァタツェスが後を継いだ。新皇帝ヨハネス3世（1221～54年）は、1225年にポイマネノンでラテン帝国を破り、小アジアからラテン勢力を駆逐した。ニカイアのヨーロッパ側への侵攻は、当初はテッサロニケ皇帝テオドロスによって阻止された。しかし、テオドロス没落の結果、ニカイア帝国は1230年代にヨーロッパ側に侵攻した。13世紀の大事件であるモンゴル帝国による西ユーラシア侵攻の影響は、帝国にとって好機になった。ブルガリア帝国とルーム・セルジューク朝が、モンゴルに服属し弱体化したためである。1246年に、ニカイア帝国はテッサロニケを占領し、テオドロス・コムネノス＝ドゥーカスとその一族を追放した。また、エピロスの支配者ミカエル2世もヨハネス3世の宗主権を認めた。ニカイア帝国は、1240年代後半にビザンツ故地の最大勢力となった。

ヨハネス3世は1254年に死に、その息子テオドロス2世ラスカリス（1254～58年）がニカイア皇帝となったが、その治世は短かった。後を継いだ彼の幼い息子ヨハネス4世ラスカリス（1258～61年）は、ニカイア貴族の第一人者ミカエル・パライオロゴスの傀儡となった。ミカエルは共同皇帝ミカエル8世パライオロゴス（1258～82年）となり、後に皇帝位を篡奪した。こうした混乱の中でも、ニカイア帝国はその勢力をさらに拡大した。

表5-1は、ニカイア帝国が、首都と冬宮が置かれたマグネシアで発行したコインである²⁹。1210か1211年～12年にかけて、ニカイア帝国の造幣所は、首都からマグネシアに移った

²⁶ Morriison, “The Emperor”, p.188.

²⁷ Hendy, *Catalogue*, p.641. 本稿におけるカラットは、宝石の重量単位ではなく、純金を24カラットとする金の純度の単位である。

²⁸ C. Morriison, C. Brenot, J-P. Callu, J-N. Barrandon, J. Poirier, R. Halleux, *L’or monnayé I: purification et altérations de Rome à Byzance*, Paris, 1985.

²⁹ Hendy, *Catalogue*, pp.447-540.

と考えられている³⁰。テオドロス 1 世は、アスプロン・トラキュ銀貨とアスプロン・トラキュ銅貨しか発行していない。だが、ヨハネス 3 世以降のニカイア皇帝たちは、4 種類のコインを発行した。3 種類のコインは最盛期のテオドロス・コムネノス=ドゥーカスと同じだが、ニカイアの 4 種類目のコインは、半テタルテロン銅貨ではなくヒュペルピュロン金貨であった。ニカイアの支配者が発行したコインは、他の政権より現存するものが多い。この点は、金貨を発行したことに加えて、これらの造幣所における貨幣発行の特徴である。

表 5-1 ニカイア帝国が首都とマグネシアで発行したコイン

	-----	-----	-----	-----	-----
----- 1 ----- _1205_21_	-	-	-	-	-
----- 3 ----- _1221_54_	-	-	-	-	-
----- 2 ----- _1254_58_	-	-	-	-	-
----- 8 ----- _1258_61_	-	-	-	-	-

表 5-2 ニカイア帝国と再興ビザンツ帝国の金貨の金含有率

	-----	-----	-----	Morrison et al. "Proton"	
				-----	-----
----- 3 ----- _1221_54_	16	perperi ingiallati	18	70.2	16.85
		perperi latini	16 1/2		
		perperi comunali	16 3/4		
		perperi buoni	+16 2/3		
		perperi d'un' altra ragione	-16 2/3		
----- 2 ----- _1254_58_		-	-	71.4	17.1
----- 8 ----- _1258_82_	15	perperi pagliallocati	15 1/2	65.1	15.6

表 5-2 は、ニカイア帝国と再興したビザンツ帝国の発行したヒュペルピュロン金貨の金含有率である³¹。これらの金貨の金含有率は、ビザンツの年代記作家パキュメレスと先にも紹介したペゴロッチェによって言及されている。パキュメレスは、金貨の金含有率を、ヨハネス 3 世以降は 16 カラット、ミカエル 8 世の時代には 15 カラットであると言及している。ペゴロッチェによると、ヨハネス 3 世のヒュペルピュロン金貨は-16 2/3 カラットから 18 カラット、ミカエル 8 世については 15 1/2 カラットであるという。

彼らの言及は、近代の古銭学による分析結果によって裏付けられる。モリソンらによる

³⁰ Hendy, *Catalogue*, pp.133-134.

³¹ G. Pachymeres, *De Michaela et Andronico Palaeologis*, ed. I. Bekker, Bonn, 1835, 2 vols, II, pp.493-494. Pegolotti, *La pratica*, pp.288-289. Hendy, *Studies*, p.527, Table 23. C. Morrison, J. N. Barrandon, and S. Bendall, "Proton Activation and XRF Analysis: An Application to the Study of the Alloy of Nicaean and Palaiologan Hyperpyra Issues", in *Metallurgy in Numismatics*, vol.2, ed. W. A. Oddy, London, 1988, pp.23-39.

分析は、ヨハネス 3 世の金貨の金含有率が平均で 70.2% (16.85 カラット)、テオドロス 2 世については 71.4% (17.1 カラット)、ミカエル 8 世については 65.1% (15.6 カラット) であることを示している。ヨハネス 3 世と彼の後継者たちが発行した金貨の金含有率は、イヴァン 2 世の金貨同様、12 世紀の金貨よりも低かった。ミカエル 8 世の金貨の金含有率は、ヨハネス 3 世よりも低い、ミカエル 8 世の後継者の時代にはさらに低下していく。

表 5-3 ニカイア帝国がテッサロニケで発行したコイン

	----- --	----- -----	----- -----	----- --	----- --
3 ----- _1246 54_	-	-	-	-	-
2 ----- _1254 58_	-	-	-	-	-

表 5-3 は、ニカイア帝国がテッサロニケで発行したコインである³²。テッサロニケ占領によって、帝国は、1246 年以降マグネシアに加えてこの地でも、アスプロン・トラキュ銀貨とアスプロン・トラキュ銅貨の 2 種類のコインを発行した。ただ、テオドロス・コムネノス＝ドゥーカスがここで 4 種類の貨幣を発行したことを考えると、この造幣所の重要性はニカイア帝国にとって限定されたものだったといえよう。

ニカイア帝国に対しラテン勢力は弱体化していたが、1240 年代後半から、アカイア公ギョーム 2 世ド・ヴィルアルドゥアン (1246～78 年) がペロポネソス半島を中心に影響力を強めていた。テッサロニケ王国の崩壊後、アカイア公はラテン帝国の第 1 の封臣となり、自らはナクソス公やアテネ領主、エボイア島のヴェネツィア人領主たちを封臣としていた。1249 年、ギョームは城塞都市モネンヴァシアを陥落させてペロポネソス半島全土を征服した。同年、ギョームは、フランス王ルイ 9 世 (1226～70 年) が編成した第 7 回十字軍に参加した。14 世紀の年代記作家マリノ・サヌードによると、1250 年にギョームがフランスと同型のコインを発行する権利をルイ 9 世から認められたという³³。

1255 年、ギョームのヴェネツィア人の妻が死んだ。彼女のエボイア島にあった封土をめぐって、彼はヴェネツィアと紛争になったが、1258 年、この争いに勝利した。また、同年ヴェネツィアに味方したアテネ領主ギー 1 世ド・ラ・ロシュ (1225～63 年) を服属させた。こうして、ギョームは、ギリシャ南部における自らの宗主権をより一層強固にした。

だが、ニカイア帝国が、ギョームの勢力圏に隣接するテッサリアに侵攻してきた。彼は、

³² Hendy, *Catalogue*, pp.601-617.

³³ Marino Sanudo Torsello, *Istoria del Regno di Romania*, ed. C. Hopf, *Chroniques gréco-romanes*, Berlin, 1873, p.102. D. M. Metcalf, "Frankish Petty Currency from the Areopagus at Athens", *Hesperia*, vol.34 no.3 (1965), pp.203-223. Stahl, "Coinage and Money", p.203.

ニカイア帝国を阻止するために、神聖ローマ皇帝フリードリヒ2世（1220～50年）の庶子シチリア王マンフレディ（1258～66年）とエピロスのミカエル2世コムネノス＝ドゥーカスと同盟を結んだ。ギョームは、マンフレディとミカエル2世の送った援軍とともに進軍した。だが、反ニカイア連合軍は、1259年にペラゴニアの戦いで敗れた。ニカイア軍によって、ギョームは捕らえられ、エピロス政権の首都アルタは占領された。ギョームは1262年メッシニア地方を譲渡する代わりに解放されたが、その最盛期は過ぎ去った。

貨幣政策としては、マリノ・サヌードの証言が示すように、ギョーム2世はフランス式のコインを発行した。ギョームの治世は亡命期以降も続くために、どの時期からコインを発行したのかはわからないが、古銭学の研究によると亡命期の中に既にコインを発行し始めていたらしい。また、アテネ領主ギー1世も亡命期以前にフランス式コインを発行していたという³⁴。ギリシャ南部を支配したフランス系諸侯がビザンツ式を採用しなかったことは、これまでに見た諸政権の貨幣発行政策と比べて特徴的であろう。

さて、アカイア公を中心とした反ニカイア連合に勝利したニカイア帝国にとって、コンスタンティノーブル奪還は目前となっていた。1261年、偵察中のニカイア帝国の一隊が、偶然ラテン帝国軍が不在だったコンスタンティノーブルを奪回した。ミカエル8世はコンスタンティノーブルに入城し、改めて皇帝としてハギア・ソフィア聖堂で戴冠された。こうして、コンスタンティノーブルを首都とするビザンツ帝国は再興した。だが、ミカエル8世は、ラテン帝国再興を目指すシチリア王国の脅威に直面することとなる³⁵。

結びにかえて

「はじめに」で述べた3つの傾向を整理し、亡命期における貨幣発行の意義をプロパガンダの手段としての貨幣の役割を中心に考察することで、本稿の結びにかえたい。第1に、亡命期に多くの政権が発行したコインは、アスプロン・トラキュ銅貨とアスプロン・トラキュ銀貨であった。貨幣をプロパガンダの手段として考えると、なぜテタルテロン銅貨や半テタルテロン銅貨のような低額のコインよりも高額のものを選好されたのだろうか。これはおそらく諸政権にとって、アスプロン・トラキュ銅貨とアスプロン・トラキュ銀貨が

³⁴ Metcalf, “Frankish Petty Currency”. Idem, *Coinage of the Crusades and the Latin East in the Ashmolean Museum*, Oxford, 2nd ed., London, 1995, pp.252-257.

³⁵ D. J. Geanakoplos, *Emperor Michael Palaeologus and the West, 1258-1282: A study in Byzantine-Latin Relations*, Cambridge-Harvard, 1959. S・ランシマン『シチリアの晩禱—13世紀後半の地中海世界の歴史』榊原勝・藤沢房俊訳、太陽出版、2002年。

政権を維持するために必要な支払手段³⁶として重要だったためであろう。言い換えれば、貨幣の受領者がこれらのコインを、一般的な交換手段として望んでいた可能性がある。つまり、諸政権にとって財政的・経済的に実用性があるコインが、選好されたといえよう。

第2に、皇帝を称した時期のテオドロス・コムネノス=ドゥーカスとヨハネス3世以降のニカイア皇帝たちは、かつてのビザンツ帝国が発行した貨幣体系を広くカバーしていた。これは、12世紀にビザンツ帝国であった領域に対して、自身を皇帝として正統化するためのプロパガンダとして有効だっただろう。これに比べて、皇帝を称していないビザンツ継承国家の支配者は、かつての貨幣体系を網羅しなかった。さらに、ラテン帝国とテッサロニケ王国のコインに至っては、支配者の銘がなかった。これらの政権は、プロパガンダの手段として貨幣を有効活用できなかった。特にラテン帝国とテッサロニケ王国は全く活用できなかったといえるだろう。他方、アカイア公ギョーム2世やアテネ領主ギー1世が自らの銘を持つフランス式のコインを発行したことは興味深い。この点は、彼らがギリシャ南部を根拠として、ビザンツ的ではない支配権を確立しようとしたことを示しているだろう。また、フランス王ルイ9世とその弟アンジュー伯シャルル（シチリア王カルロ1世として1266～82年）による地中海政策との関連も指摘できるだろう³⁷。

最後に、ヨハネス3世以降のニカイア皇帝たちとイヴァン2世アセンは、自らの銘を打刻した金貨を発行した。12世紀の地中海世界において、ヒュペルピュロン金貨は国際的交換手段のひとつであった。この金貨を造った亡命期の支配者たちはビザンツ皇帝としての自身の正統性を地中海世界に主張することができただろう。だが、イヴァン2世は限定的に金貨を発行しただけで、彼の後継者たちは金貨を発行しなかった。一方、ヨハネス3世以降のニカイア皇帝たちは継続的に多くの金貨を発行した。金貨を発行することによって、ニカイア皇帝たちは国際的なプロパガンダに成功したが、イヴァン2世はプロパガンダの手段として金貨を有効に活用できなかったといえよう。

だが、金含有率の点で、ニカイア帝国のヒュペルピュロン金貨は12世紀のものより低かった。この点は、プロパガンダとしての効果を弱めると共に国際的には良質な金貨の供給

³⁶ ここでの支払手段とは、市場経済における交換手段よりも歴史的に古く発生したとされる非市場的な貨幣の機能である。K・ポランニーによる社会学的な責務の解消である支払手段や、M・ウェーバーによる「給付義務」解消のための貨幣給付である支払手段に近い機能を想定している。吉沢英成『貨幣と象徴』ちくま学芸文庫、1994年。

³⁷ ルイ9世とアンジュー伯シャルルの地中海政策については、J・ル・ゴフ『聖王ルイ』岡崎敦・堀田郷弘・森本英夫訳、新評論、2001年。ランシマン『シチリアの晩禱』。

不足を招いたであろう。西ヨーロッパの諸政権は 1252 年以降、シャルルマーニュの後継者の時代から発行されていなかった金貨の発行を再開した³⁸。この史実は、おそらくニカイア金貨の金含有率が低くなったことに一因を求めることができよう。1252 年以降、金含有率の高い金貨の主な供給者は、イタリアの諸都市国家になった。これに対して、ニカイア帝国と再興ビザンツ帝国の皇帝たちは、金貨の金含有率を減らし続けた。ニカイア帝国は、コンスタンティノープルを奪回することには成功した。だが、国際的交換手段のひとつとしてのヒュペルピュロン金貨の時代は終焉し、二度と復活することはなかった。

³⁸ R. S. Lopez, “Back to Gold, 1252”, *Economic History Review*, ser. ii. 9 (1956-7), pp.219-40. A. Watson, “Back to Gold-and Silver”, *Economic History Review*, ser. ii. 20 (1967), pp.1-34. ただ、シチリア王国では、タリ金貨（11 世紀以降）とアウグスタリス金貨（1231 年以降）の 2 種類の金貨がそれ以前から発行されていた。Ph. Grierson and L.Travaini, *Medieval European Coinage: With a Catalogue of the Coins in the Fitzwilliam Museum, Cambridge, vol.14: Italy (III) (South Italy, Sicily, Sardinia)*, Cambridge, 1998.